白藍塾オリジナル
2026年度 入試小論文分析＆解答のヒント

2026 年 3 月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

● 慶応・文学部

例年通り、長めの要約問題＋短めの小論文問題の２本立て。

課題文は、人工知能について美学的観点から論じた文章だ。文章自体はそれほど難しくないが、論理展開が入り組んでいるので、要約するとなるとかなり苦労するだろう。そもそも最初の２ページはテーマとほぼ無関係な内容だが、設問Ｉでは全文要約が求められているので、その部分も含めて全体をまとめると、次のようになる。

「人工知能の『知能』というのは、機械の中にある脳のような何かの働きとイメージされてきたが、そうした古典的なイメージは現代では無効になっている。一方、人工知能の『人工』が何を意味するかは自明ではない。人工的であるとは人間の技術の所産であるということだが、技術は、現代では自然と対立するものと考えられている。だが、カントによれば、自然も物理法則に従って作動する巨大な機械のようなものなので、人間の意思や自由とは対立するものの、技術とは単純に対立関係にあるわけではない。技術一般は外部に目的を持つ点で自然と区別されるが、芸術のように、それ自体の目的に適っているような技術は、いわば自由な遊びとして、自然の産物のように見えるものだ。このように、技術と自然の間には、相互に照らし合う二重の関係がある。」

設問Ⅱは「自然と技術（アート）の関係」についての考えを論じることが求められている。

課題文は、要は「技術は自然と単純に対立するものではない」と言っているので、その考えが正しいかどうかを問題提起するとよい。とはいえ、受験生がこれに反対して説得力のある論を展開するのは難しいので、イエスの立場から、課題文の論を自分なりに補強するつもりで考えるのが書きやすいはずだ。

課題文にもあるように、すぐれた芸術作品を取り上げて論じることもできるが、どちらかと言うと、もっと一般的な技術について論じるほうが書きやすいだろう。

例えば、すぐれた工芸品は、機能性に徹した簡素さゆえにかえって人間による作為を感じさせず、独自の美的価値を持つようになる（いわゆる「用の美」）。また、古いテクノロジーの産物は、時間の経過に伴って作為の跡を感じさせなくなり、しばしば自然の風景の中に溶け込んでいくように感じられる。人間の技術がもともと自然を自分たちにとって利用しやすいように改変することで成り立ってきたことを論じてもよいだろう。

AI の問題と絡めて論じることもできなくはないが、強引なこじつけになりかねないので、よほど自信がなければ避けたほうがよい。

いずれにしても、課題文のテーマを的確に捉えて書けているかどうかがポイントになるので、課題文からずれないように注意が必要だ。

＊ 執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室（03-3369-1179） https:// hakuranjuku.co.jp